九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

日本語の擬態語の音象徴について認知言語学的視点から

伊東, 真美
新潟産業大学経済学部

https://doi.org/10.15017/2794863

出版情報：芸術工学研究. 11, pp.19-35, 2009-11-20. 九州大学大学院芸術工学研究院
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

研究論文

日本語の擬態語の音象徴について
認知言語学的視点から

The sound symbolic-system of Japanese onomatopoetic words: in terms of cognitive linguistics

伊東真美
ITO Mami

Abstract
Onomatopoetic words expressing manners of action, psychological conditions(=*gitaigo*) are normally created from the mental image of the action, state, and condition, not normally imitated from the original sound of that animate or inanimate object. The purpose of this paper is to exhibit the relations of sound and meaning in *gitaigo*. There are two types of *gitaigo*. One is developed from *giongo*. For example, *kasa-kasa*, originally *a giongo* word, expresses a sound of dry leaves, and its extended meaning becomes the dry state of something. By clarifying some patterns of the metaphor from *giongo* to *gitaigo*, the relations of sound and meaning of *gitaigo* is exhibited. The other type of *gitaigo* is not originated from *giongo,* and in many cases it has several distinct meanings. For instance, *bura-bura* expresses both 'swinging rather fast' and 'idling' of something a little heavy or something firm. In the latter type of *gitaigo*, the phonological shape of a *gitaigo* word determines its meaning. The common meaning in the same honological shape is called a schema and the schema is the prototype of each *gitaigo* word. By implementing the notion of schema and prototype in cognitive linguistics, the sound symbolic system of a *gitaigo* word is able to be revealed systematically.

1. はじめに

日本語には物理的な音を真似て作られた言語音である擬音語と状態や様態を表す擬態語が豊富にある。特に、心情を表すオノマトペは擬情語と呼ばれるが、本稿では擬態語の一部とみなす。擬音語と擬態語は総称してオノマトペと呼ばれる。本稿では、擬態語として使用される例は平仮名で、擬音語として使用される例は片仮名で表記する。オノマトペは副詞として使用されることが多いが、動詞「する」や接尾辞「つく」、「めく」等と結びついて「ねばねばする」「むかつく」「きらめく」のように動詞になることもある。また、「とろい」「ゆるい」などのようにオノマトペから造られたと考えられる形容詞もある。さらに、漫画や広告では「どきどき」「わくわく」「ほかほか」「さくさく」などのように独立して使用されることもしばしばみられる。オノマトペは2モーラを基本とし、様々なバリエーションが存在する。例えば、[kira]という2モーラから[kirari][kiraQ][kiraN][kira-kira]のようなオノマトペが造られ、意味はほぼ同じであるが、微妙な違いを表す。

通常、言葉を構成する音韻形態と意味との関係は恣意的であるとされている。しかし、オノマトペは音と意味との関係に一定の関連性がある。即ち、非恣意的であるとされている。擬音語であれば、物理的な音を真似て言語音が造られる。例えば、石がぶつかる音が聴覚で認知され、日本語という言語フィルターがかけられ、「カチッ」と表されるようになったと考えられる。擬音語は多くの国の言語に存在する。物理的な音は同じであっても、言語が異なれば、異なった文字で表され、発音の仕方も異なってくる。例えば、動物の鳴き声はどの国でも実際は

同じであるが、言語音にすると異なる。一方で、鉄砲の音などが様々な国の言語で[p]や[b]から発音されることなどからも、擬音語においては、音と意味のつながりがある程度非恣意的であることが指摘されている。

しかし、擬態語に関しては、物理的な音を真似てできたものではないため、音と意味との恣意性が擬音語と比較すると曖昧である。擬態語は言語によっては非常に少ないが、日本語においては豊富にある。数も多く日本語の語彙の一つの特徴である擬態語の音象徴を明らかにすることが本稿の目的である。

本稿の構成は以下のとおりである。1章では本稿の目的と構成を記した。次章では、これまでのオノマトペの音象徴に関する研究の概観とその問題点を明らかにした。また、オノマトペの形態的特徴、統語的特徴及び意味的特徴に関する先行研究を概観した。3章では、擬態語の音象徴を体系的に示すための認知言語学的アプローチによる方法について説明した。4章では実際に認知言語学的アプローチにより①「擬音語から拡張した擬態語」と②「音韻形態がスキーマとなっている違擬態語」に分けて分析した。5章では分析によって得られたデータをまとめて示した。6章では本論文の独自性と今後の抱負を記した。

2. オノマトペの先行研究

2.1 オノマトペの音韻的特徴

2.1.1 オノマトペの音象徴について

オノマトペにおける音象徴について、Hamano（1986）は特定の音ないし音の組み合わせがオノマトペに関する限り、特定可能な音象徴的意味をもっており、日本語の音象徴が体系的であると述べている。即ち、日本語の2モーラのオノマトペの基本的な音象徴的意味は、その音の構成要素から予測できると主張している。また、1モーラを基本形に持つオノマトペ、および2モーラの語基を持つオノマトペの第1モーラにおいて、特定の母音と子音が多様な意味を持っていることを指摘して次の例を挙げている[1)]。

＜母音＞

/a/

[a]は平べったさ、大きな表面に影響を与える出来事、関わっているものの全面的関与、広がり、華やかな、派手な、あるいは目立った出来事といった多様な意味と関連している。

/i/

[i]は線ないし一直線に延びたものを、また音の場合には甲高い音を表す。さらに2モーラの語基を持つオノマトペは光の光線と関係している。

/u/

[u]は口や鼻のような、小さい丸い穴と関係のある出来事や突出と関係しており、音の場合には柔らかくて控えめな音を表す。また、小さい突出した丸いものと対応している。

/e/

[e]は動作の不適切さないし下品さという意味と関連がある。

/o/

[o]は丸いもの、小さい出来事あるいは小さい部分にしか影響を与えない出来事と関連している。また、目立たないもしくは控えめな出来事と関連している。

＜子音＞

/p, b/

日本語のオノマトペの語頭に起こる[p][b]は、物体に打ち当ったり、破裂したりするような、急で爆発的な動作や出来事、ないしはこのような出来事の前提条件である「ぴんと張った状態」や突然性や力強さを表す。[p]は活発さや活動的な動作と関連がある。

/t, d/

日本語のオノマトペの語頭に起こる[t][d]は打撃と関連がある。このような動作に関わっているものは「木材・床・地面」である。

/k, g/

[k][g]は金属のような硬い表面との接触を表す。また、母音[i]と共に甲高い音を表し、母音[o][u]と共に深いくぼみや穴、ないしは軟口蓋咽頭音を表す。

/s, z/

1モーラを基本形に持つ日本語のオノマトペの語頭に起こる[s][z]は滑らかさ、障害の欠如、動作が急でないことを表す。2モーラのオノマトペの場合には、軽い接触、摩擦、小粒の動き、表面の張りがない、流動する液体、障害の不在、ゆったりした動き、静けさ・穏やかさ、壮快さ、冷静さを表す。

/h/

語頭の[h]は不確定、頼りなさ、弱さ、ないしは繊細な優雅さを表す。

/m/

2モーラを語基に持つオノマトペの場合、語頭の[m]は、

はっきりしない状態という意味を象徴し、二次的に落ち着きのなさ、ないし理性のなさを表す。1モーラを基本形に持つオノマトペの場合、語頭の[m]は抑制や不明瞭さを表す。

/w/

1モーラを基本形に持つオノマトペでは、語頭の[w]が動物や人間の発する音を表す。

/N/

[N]は共鳴を表す。音や動作・状況などがとりあえず終わりはするが、その結果が残存したり、余韻が残るということを表現している。

/Q/

語末に起こる促音[Q]は瞬間性、スピード感、音や動作の急な終わり方を表す。生き生きとした臨場感を与える。語中に起こる促音は強調の挿入辞と見なすことができる。

/ri/

語末の[ri]はゆったりした感じ、完了を表す。

早川（2007）は個々の音素ではなく、音素の組み合わせ、特にオノマトペにみられる2モーラがどのような意味をもっているかについて、下記のように「かち」、「がち」を例に挙げて説明している[2)]。

「かち」はとてもかたいようすや、かたいものがぶつかってたてるときの音を表す。濁音形の「がち」では、よりかたさが増し、ぶつかったときの衝撃も大きい感じを表す。「かち」「がち」を含むオノマトペには、多くの語群があるが、対象物に、自由に流動する水分が含まれておらず、とてもかたそうなようすを表す場合は擬態語であり、かたいものがぶつかってたてる音を模した場合は擬音語である。かたいというイメージから発展して、「かっちりした人」「がちがちに緊張する」「がっちり屋」のように、人の性格が堅実なさま、すきやゆとりがないさま、抜け目がないさまにも使われる。さらに、「かちんとくる」のように、相手の言動が、まるでかたいものが鋭く自分の感情にあたったように感じられて不愉快なさまにも使われる。

擬態語に音象徴があることを示す先行研究として、田守・スコウラップ（2001）は日英語の唇音と「肥満」という意味要素の対応について詳しく述べている[3)]。比喩的あるいは婉曲的に肥満を表す場合でさえも、唇音が肥満と関連する日英語ほとんどすべての語に起こっていることが示されている。また、日本語には水しぶきの音を表す語が非常に多くあるが、英語ではこの分野の語はよく似た形態をしており、ほとんどすべてが両唇閉鎖音と粗擦音の両方を含んでいるとしている。また、水しぶきの音を表す日本語もほとんどが英語同様の音声要素を含んでいるとしている。日本語には乾燥したものが触れ合う音を表す語がたくさんあるが、英語同様、これらの音はほとんど全て粗擦音を含んでいるとしている。

田守・スコウラップ（2001）の見解は、日英語共通の音象徴が存在する可能性を示唆するものである。また、「肥満」を表すオノマトペ、即ち音を表さない擬態語に音象徴が存在することを示している。

2.2 オノマトペの形態的特徴

田守・スコウラップ（2001）によると、日本語のオノマトペの音韻形態は一見多様に見えるが、大雑把に言って、1モーラないし2モーラの基本形にまとめることができるとしている。さらに、オノマトペの形態的特徴について次のように説明している[3)]。1モーラを基本に持つものは極めて稀で、通常促音ないし撥音が伴う。母音が長音化された形態を持つオノマトペも多数存在する。2モーラを基本に持つものは、1モーラだけで構成されているものと同様、たいていが古めかしい響きを持ち、現代日本語としては稀であるとしている。2モーラの語基には通常、促音ないし、「り」が伴う。CVCVNは2モーラの語基に撥音が付いたものであるが、この形態を持つオノマトペは2モーラの語基に促音の付いたものと対応していることが多い。またごく少数であるが、2モーラの間に促音や撥音が挿入された形態も見られる。

CVQCVriやCVNCVriはかなり古めかしい響きを持ち、現代日本語においては珍しい形態であると言える。CVQCVri及びCVNCVriは2モーラの間に促音ないし撥音を含み、しかも語末に「り」を伴うという形態をとり、日本語のオノマトペの典型的な形態の一つである。2モーラの反復した形態は、日本語のオノマトペの最も一般的な形態である。2モーラの反復形の変種と考えられる形態もある。

日本語のオノマトペの主な音韻形態とオノマトペの例を次の表1で示す。

C ＝ consonant（子音）、V＝vowel（母音）、Q ＝ 促音（っ）、N ＝ 撥音（ん）ri ＝ り

音韻形態	オノマトペの例
CV	ふ（と）　つ（と）
CVQ	ふっ　はっ　ほっ
CVN	ばん　ぼん　ちょん　かん　こん
CVV	がー　ぐー　かー
CVVQ	ばーっ　ふーっ　かーっ　ぱーっ
CVVN	ばーん　がーん　ごーん　きーん　かーん
CVQ-CVQ	くっくっ　さっさっ　ぱっぱっ
CVN-CVN	ばんばん　ぼんぼん　かんかん　ぱんぱん
CVV-CVV	がーがー　かーかー　ざーざー
CVCV	がば　ぐい　はた　ひし　ひた　ぴた
CVCVQ	ばたっ　ばさっ　ばらっ　ぐさっ
CVCVri	ばたり　ばさり　ばらり　ぐさり　ころり
CVCVN	ばたん　ぼとん　どきん　ごろん　こつん
CVQCV	どっか　はっし　すっく
CVNCV	むんず　ざんぶ
CVQCVri	ばっさり　ばったり　がっくり　ぐったり
CVNCVNri	ぼんやり　ふんわり　げんなり
2モーラ反復形	ばさばさ　ばたばた　ころころ　きらきら
2モーラ反復形の変種	がさごそ　がたごと　からころ　かさこそ

表1　日本語のオノマトペの主な音韻形態
（田守・スコウラップ 2001）

2.3　オノマトペの統語的特徴

2.3.1　形容詞的活用の接尾辞

田守・スコウラップ（2001）によると、オノマトペが関与しているイ形容詞は、少数であるが存在する[3)]。このようなイ形容詞は2種類あり、1つは、オノマトペに形容詞を導く接尾辞である「しい」「い」「っこい」「ない」などを付加して派生したもので、「けばけばしい」「とげとげしい」「のろい」などである。もう一つは、イ形容詞にオノマトペの語基を接頭辞として付加して派生したものである。「ほろ苦い」「むず痒い」「ひょろ長い」等である。また、日本語には「か」「やか」というナ形容詞的活用をする接尾辞がある。2モーラに接尾辞「か」「やか」がついてナ形容詞的活用をする。例えば「ひそか」「にこやか」「ゆるやか」等である。このような接尾辞がつくオノマトペは2モーラの反復形の形態を持っている。

2.3.2　ナ形容詞として活用するオノマトペ

日本語のオノマトペがナ形容詞として使用されている場合、「つるつるになる」のようにナ形容詞の連用形「に」に「なる」がついて、結果の状態を表すことが多い。このようなナ形容詞となるオノマトペの形態は次に挙げたように2モーラの反復形に限られている。また、ナ形容詞の機能を持つオノマトペは副詞や名詞としての機能を必ず併せ持っている。以下に、ナ形容詞として機能している日本語のオノマトペを挙げた。

［ナ形容詞の機能を持つオノマトペ］

ばらばら、めちゃくちゃ、ごちゃごちゃ、でこぼこ
くしゃくしゃ、ぼろぼろ、びしょびしょ、どろどろ
こちこち、かさかさ、ざらざら、つるつる
ごつごつ、ふらふら、ふわふわ、ぐにゃぐにゃ
がらがら、ぴったり、ぎりぎり、すれすれ
だぶだぶ、ぴかぴか等

2.3.3　動詞的活用の接尾辞と結びつくオノマトペ

日本語の動詞的活用の接尾辞は「つく」「めく」「げる」「かる」「ぐ」「ける」「む」「める」「やく」「る」「かす」等があり、オノマトペの2モーラと接続する。「つく」が最も生産的である。結びつくオノマトペは擬情語もしくは擬態語に限られている。日本語のオノマトペは「よろける」「よろつく」「よろめく」のような例外はあるが、基本的には結びつく接尾辞が一つに決まっている。このような接尾辞の役割にオノマトペを活用させて瞬間性及び継続性を表すというものがある。例えば、「星がきらめいた」のように「星がきらっとした」とほぼ同義に瞬間性を表すこともでき、接尾辞のアスペクトを進行相にして「星がきらめいている」のように「星がきらきらしている」とほぼ同義に継続性を表すこともできる。ただし、ニュアンスの違いはある。日本語の動詞的活用の接尾辞自体は繰り返しの意味を含んでいないが、アスペクトを変えることによって瞬間性及び継続性を表せる。日本語の動詞的活用の接尾辞は他の活用と違って瞬間性を表せ

ることから、動作性を強調すると考えられる。また、接尾辞「つく」は「にやつく」「むかつく」「よろつく」「べとつく」等のように、マイナスのイメージのオノマトペと結びつく場合がほとんどである。

2.3.4 動詞「する」と結びつくオノマトペ

動詞「する」はオノマトペを活用させる最も生産的な要素である。動詞「する」には様々な意味があるが、オノマトペと結びつく際の「する」は何らかの行為を表すものではなく、状態を表すものである。従って、擬情語（うきうき、わくわく等）には例外なく「する」が結びつくが、動作性の強いオノマトペや擬音語（ぼきぼき、こんこん等）は「する」と結びつきにくいと考えられる。動作性が強いオノマトペは「ぐるぐる(回る)」「てくてく（歩く)」「じろじろ（見る)」等のように動きを表現するものである。様態性が強いオノマトペは「くねくねした道」「つるつるした床」「ごつごつした壁」等のように静止した状態を表すものである。ただし、様態性や動作性は主観的なものであり、状況や捉え方によって変わるものである。

2.4 オノマトペの意味的特徴

オノマトペの意味を分類した先行研究はいくつかあるが、大きく分けて感覚に基づいたものとオノマトペ自体の意味に基づいたものの２種類ある。

オノマトペの意味的特徴に関する分析として大坪（2006）が挙げられる。オノマトペは音声の持つ特殊な情感を利用して、端的に事物の状態を描写する言葉であり、事物の状態とは、視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚など、いわゆる五感を通して知覚される一切のもの、さらには生理的な内部感覚から、心理的な感情・情緒に関するものまでも含んでいるため、事物の状態の把握の仕方を基準として分類できるとして、オノマトペの意味を次のように７種類に分類している[4]。

(1) ある状態を耳で聞いて表現するもの。
　例：カタカタ、ゴロゴロ、ピューッ
(2) ある状態を目で見て表現するもの。
　例: きらきら、むくむく、どんより
(3) ある状態を手や肌で触れて表現するもの。
　例: ぬるぬる、つるつる、ざらざら
(4) ある状態を鼻で嗅いで表現するもの。
　例: ぷんぷん、つん
(5) ある状態を舌で味わって表現するもの。
　例: とろり、ぴりり
(6) ある状態を身体の内部感覚で感じて表現するもの。
　例: ひりひり、ずきずき
(7) 感情・情緒のような心の状態を心理的に表現するもの。
　例: はらはら、わくわく、ぞくぞく

秋元(2002) はオノマトペを意味の面から次のように分類している[5]。

(1) 自然現象
例： からり、ぎらぎら、ぽかぽか
(2) 動物の鳴き声
例： カーカー、チューチュー、ブンブン
(3) 人の声・音
例： キャーキャー、ワーワー、ワハハハ
(4) 動作
例： さっさ、てくてく、ぱくぱく
(5) 人の様子・心情・痛み
例： いそいそ、がっくり、びくびく
(6) 人の身体的特徴
例： がりがり、なよなよ、ひょろひょろ
(7) 人の健康状態
例： ぐったり、ぴんぴん、へとへと
(8) 物が出す音
例： ガタガガ、ガチャン、トントン
(9) 物の動き
例： くねくね、ぐるぐる、ころころ
(10) 物の様態・性質
例： かちかち、てかてか、どろどろ

大坪（2006）と秋元（2002）の意味分類を参考にして、意味と感覚に基づいた上記の分類を以下の通りＡからＥのように五つのカテゴリーに分類した。

A. 動物の鳴き声、人の声・音、物が出す音
B. 人の様子、心情、人の身体的特徴、味、匂い
C. 自然現象、人の健康状態、物の様態・性質
D. 人の動作、物の動き
E. 形態はオノマトペであるがオノマトペとして
　あまり認識されていないもの。

E のオノマトペとしてあまり認識されていないものと

は、「しっかり」「きっちり」「ゆっくり」など、様々な文脈で使用され、一般語彙でも置き換えがしやすいものである。音が関わっているかいないかを基準とした場合、Aが音が関わっている擬音語となり、それ以外は擬態語となる。これらの意味的に擬音語と分類されるものと擬態語に分類されるオノマトペの例を擬態語の音象徴の分析の対象とする。

2.5 オノマトペ研究の問題点

Hamano(1986)の音象徴に関する先行研究では、オノマトペを構成する母音や子音、そして促音や撥音、「り」や長音に一定の意味があるとされている。また、無声音と有声音の意味的対応についても研究されている。これらの研究では1モーラを基本形に持つオノマトペ、および2モーラの語基を持つオノマトペの第1モーラにおける音韻的特徴しか示されておらず、二つ以上の子音や母音の組み合わせがどのような意味を持つかについては体系的に示されていない。擬音語はC1が音の性質を決めるが、擬態語の場合は2モーラを構成する音素の組合せに意味があると考える。

早川(2007)は「かち」「がち」という2モーラを挙げて、物質音が聴覚で認知され、音の発生源である「固いもの」が喚起され、さらに人の性格にメタファー化されていると述べている。このような擬音語から擬態語への拡張を認知言語学のメタファー化の概念を用いて説明を試みる。また、個々のオノマトペを見ただけではその音韻形態と意味との関係はつかみにくいため、共通の音韻形態を持つオノマトペを集めて、その共通の意味を探る必要があると考える。

3. オノマトペ研究への認知言語学的アプローチ

3.1 オノマトペにおける語彙化の程度

筧(1993)は語彙化の程度について、現実に近い表現からより遠い表現への移行に注目する必要があるとしている。さらに、実際に聞きうる音を写す擬音語から、事物の様態や感覚とか心理の状態を示す擬態語への拡張が行われるとしている。擬態語には始めから擬態語であったものと、擬音語から拡張したものとがあるが、擬音語より擬態語への拡張はあってもその逆は起こらないとしている。このような問題を「語彙化の程度」という観点から整理し、判断基準として次の2点を挙げている[6]。

(1) 引用性－引用として括弧内にはいるか、引用を示す助詞の「と」をとるかどうか。
(2) 語形変化－時制の変化を示す「活用」がみられるかどうか。

筧(1993)はこうした基準によって日本語のオノマトペを検討し、オノマトペの語彙化について、次の四つの段階を示している[6]。

＜第一段落＞　臨時形
例：ワンワン、キャピキャピ、るんるん等

＜第二段階＞
「と」を伴い、かつ「語形変化」をしないもの
例：バサッと落ちる、きちんとまとめる、ぶらぶら(と)歩く
この段階のオノマトペ間においては、かなりの差異があり、「と」の生起や、「抽象度」がその代表的なものであるとしている。

＜第三段階＞
「と」が起らず、「語形変化」をなす類
例：びっくりする、ぼんやりしていた、ふらふらだ

こうした第三段階のオノマトペは擬態語であり、その中でも心的状況を述べる擬情語であることが多いとしている。

＜第四段階＞
語源的にはオノマトペであったものが、語彙化の程度が進んで、もう一般の語と区別されなくなったもの。
例：驚く、注ぐ、騒ぐ、轟く等
このような語はオノマトペに起源するものであるが、日本語の母語話者にはそのような意識がなく、表記にも漢字が用いられるとしている。

筧(1993)の研究はオノマトペの拡張の過程を語彙化という観点から分析することによって、オノマトペが擬音語から擬態語へと拡張することを示すものである。

3.2 オノマトペの意味拡張

一つのオノマトペで表せる意味のバリエーションは言語によって異なる。例えば、例1及び例2のように、日本語は「こんこん」というオノマトペでノックする音と

咳が出るときの音を両方表せるが、対応する韓国語の場合はそれぞれ「똑똑(ddog-ddog)」と「콜록콜록(kol-log kol-log)」とで別である。このような音は物理的には異なった音であるが、日本語では同じオノマトペで表現される。

例1. こんこんとノックする。
똑똑 노크를 하다.
(ddog-ddog nokeu reul hada.)

例2. こんこんと咳をする。
콜록콜록 기침을 하다.
(kol-log kol-log gichim eul hada.)

逆に、次の例3、及び例4のように、日本語では「そよそよ」及び「すらすら」という別のオノマトペで表現されるものが、韓国語では「술술 (sul-sul)」という同じオノマトペで表されている。即ち、オノマトペの意味が拡張するメカニズムは言語によって異なるということである。

例3. 바람이 술술 불어오다.
(baram i sul-sul bureo oda.)
風がそよそよと吹いてくる。

例4. 어려운 문제를 술술 풀다.
(eoryeoun munje reul sul-sul pulda.)
難しい問題をすらすらと解く。

本研究では、擬態語における音象徴を明らかにするために、まず、オノマトペの意味拡張について概観する。オノマトペの意味拡張は次のように三つのパターンある。

① 擬音語から擬音語への意味拡張（例5→例6）
例5. アヒルがガアガア鳴いている。
例6. スピーカーからガーガー聞こえる。

② 擬音語から擬態語への意味拡張（例7→例8）
例7. 猫が柱を爪でカリカリと引っ掻いている。
例8. 仕事に行き詰ってかりかりしていた。

③ 擬態語から擬態語への意味拡張（例9→例10）
例9. 額から汗がたらたらと垂れている。
例10. 何時間も不満をたらたらと言った。

例5及び例6は実際の音は異なっているが、同じオノマトペで表されている。例7は音を表すが、例8は苛立つ様子を表すオノマトペであり、音を表さない。例9は汗が流れるようすを表し、例10は不満を言うようすを表している。共に音は表さない。

吉村(2004)はオノマトペをメタファー・メトニミーの視点から考察し、図1のようにオノマトペは基本的に擬音語から擬態語、擬情語へ拡張し、その順序で「具体」から「抽象」へ進化しているとしている[7]。

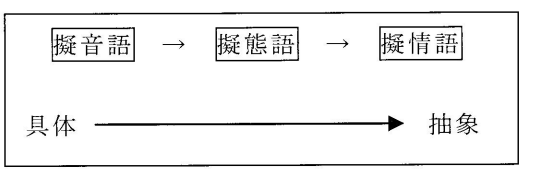

図1 オノマトペのメタファー化の経路
(吉村 2004)

しかし、一概にそうとは言えない。擬音語から拡張したのではなく、そのオノマトペを構成する音韻形態が有する意味が優先される場合があると考えられる。なぜなら、擬音語からイメージが拡張したと思われない意味も存在するからである。例えば「グルグル」というオノマトペは①腹が大きく鳴る音②続けて回るさま③幾重にも巻かれたさまのような意味がある。②や③の回るさまは①の腹が鳴る音から必然的にイメージされるものではない。②や③の意味は擬音語から拡張したのではなく、その音韻形態が持つ意味、即ちスキーマから事例化されたと考えられる。従って、擬態語には次のような形成過程があると考えられる。

① 擬音語から拡張して擬態語となる。
② オノマトペを構成する音韻形態、即ちスキーマに影響される。

①の擬音語から拡張して擬態語となる場合のイメージ拡張のメカニズムを説明するのに、山梨（1999）のイメージ拡張に関する研究を参考にする[8]。山梨（1999）は人間の創造的な理解には、少なくとも次のような認知プロセスが関わっているとしている。

(1) ある対象に関し具体的なイメージをつくり上げていくプロセス

(2) ある対象のイメージを他の対象に拡張していくプロセス
(3) ある対象のイメージを多角的な視点から組みかえていくプロセス

そして、外部世界の対象に対し、具体的な知識を背景にして様々なイメージ・スキーマがつくり上げられており、日常言語の意味は外部世界に客観的に存在しているのではなく、具体的な経験的基盤を介して理解され動機づけられていると述べ、次のような例を挙げている。

a. 彼は書斎にいる。　＜物理的空間＞
b. 彼は今タイガースにいる。　＜社会的空間＞
c. 彼は愛のまっただ中にいる。　＜心理的空間＞

本稿では、上記のような認知言語学による認知プロセス、即ち物理的な空間領域から社会的な空間領域、そして心理的な空間領域への認知プロセスを参考にして、オノマトペの意味拡張のメカニズムを明らかにすることによって、擬態語の音象徴を明らかにする。

3.3 スキーマとプロトタイプ

吉村（2004）は、「走る」の意味拡張を次の図2のように表している[7]。

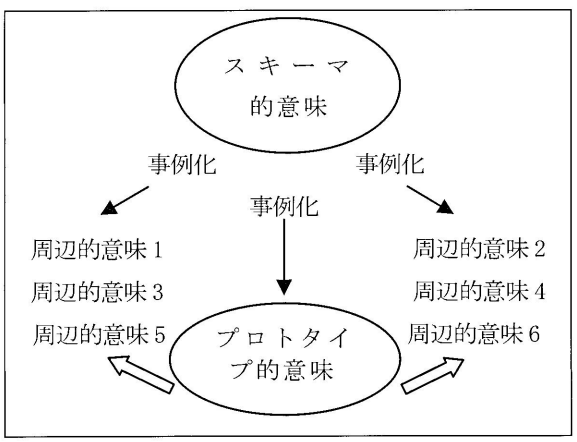

図2「走る」の意味拡張

スキーマ的意味：「走る」＝ 連続して速く動くさま

プロトタイプ的意味：「マラソンランナーが走る」
周辺的意味1：「定期バスが走っている」
周辺的意味2：「ドル買いに走る」
周辺的意味3：「道路に亀裂が走る」
周辺的意味4：「背中に痛みが走る」
周辺的意味5：「今日はボールがよく走っている」
周辺的意味6：「私利私欲に走る」

吉村（2004）は「走る」の意味拡張について次のように説明している[7]。

「走る」の全ての多義に共通する意味は「連続して速く動くさま」であり、これがスキーマ的意味となる。そのひとつの具現例である「マラソンランナーが走る」が「走る」のプロトタイプ的意味になる。「走る」の意味はプロトタイプ的意味だけではなく、「道が東西に走る」「夫を捨てて愛人に走る」「新聞に目を走らせる」「悪事に走る」「ミニスカートの走りは1960年代だった」「このペンは走りが悪い」など色々な意味、すなわち周辺的意味がある。こうした「走る」の意味はプロトタイプ的意味からの意味拡張と捉えることができる。プロトタイプ（「マラソンランナーが走る」）の「走る」の意味には、「人間が足を連続して速く動かし移動するさま」のように、「人間」「足」についての情報が潜んでいる。そこから意味拡張された「道が東西に走る」の「走る」では、「人間」「足」の代わりに「感覚（とくに痛覚）」が直線的に速く動くさまをとらえている。従って、いずれの場合もプロトタイプ（「走る」）の意味属性の一部（「連続して速く動くさま」）が共有されたかたちで属性の連鎖が生じていて、全体が家族的類似を構成している。プロトタイプ的意味にせよ、周辺的意味にせよ、スキーマ的意味の事例化であることに変わりはない。

本稿では、吉村（2004）の認知言語学的アプローチを参考にし、オノマトペの音韻形態における共通の意味をスキーマと設定し、それを各オノマトペのプロトタイプ的意味と定義する。スキーマ的意味から様々な意味が拡張すると考える。このようにして擬態語の音象徴を体系的に示す。

以下の表2では、V1[u]、V2[a]という点で一致しているオノマトペの例を四つ挙げ、1モーラのみを記した。これらのオノマトペは一般に音を表さない擬態語として認識されている。それぞれのオノマトペには次のような複数の意味がある。

kura	gura	fura	bura
●	●	●	●
↓	↓	↓	↓
○	○	○	○
↓	↓	↓	↓
○	○	○	○

表2 オノマトペのスキーマ及びプロトタイプモデル

スキーマ：「左右の揺れ」

「くらくら」
① めまいがするさま
② 湯が沸くさま
③ 気持ちが揺らぐさま

「ぐらぐら」
① 不安定なさま
② 湯が激しく沸くさま
③ 気持ちがひどく揺らぐさま

「ふらふら」
① ゆれ動くさま
② 安定感のないさま
③ 気持ちが揺れ動くさま
④ 十分考えず行動するさま

「ぶらぶら」
① ゆれ動くさま
② あてもなく歩くさま
③ 怠惰に暮らすさま

それぞれのオノマトペに共通している意味、「左右の揺れ」はスキーマでありそれぞれのオノマトペのプロトタイプ的意味である。「くらくら」「ぐらぐら」は、プロトタイプ的意味から「気持ちが揺らぐさま」や「湯が沸くさま」などへ意味が拡張している。「ふらふら」「ぶらぶら」は「安定感のないさま」「あてもなく歩くさま」「怠惰に暮らすさま」などへ意味が拡張している。それぞれの意味を丸で示した。このうち、共通の意味（左右の揺れ）を黒丸で示した。この四つオノマトペを構成する音韻形態の共通の意味がスキーマであり、それぞれのオノマトペの中心的意味であるプロトタイプと設定する。プロトタイプ的意味から様々な意味が拡張すると考える。

4. オノマトペのスキーマ及び意味拡張についての再検討

4.1 擬音語から拡張する擬態語

擬音語から擬態語、擬情語に拡張されるのにはいくつかのパターンがある。次に、擬音語から擬態語への拡張パターンをいくつか示す。

カサカサ、ガサガサ、バサバサ、パサパサ

音 → 音の発生源 → 発生源の性質 → 心情

摩擦音　乾燥したもの　乾燥状態　心の乾き

図3　擬音語から擬態語への拡張パターン1

図3で示したように、破裂音[k, g, b, p]＋[a]＋[sa]の形態をもつオノマトペはまず、音から音の発生源へメタファー化される。摩擦音を出すものは例えば乾燥した葉などである。次に、その発生源の性質、即ち乾燥状態にイメージが拡張され、「肌がかさかさしている」「髪がぱさぱさしている」のように様々なものの乾燥状態を表す。次に、「心がかさかさしている」のように、人の心に潤いがないさまを表すなど、心情への拡張がみられる。メタファー化の経路は次の図4のように表せる。

物質音 → 言語フィルター → 言語音

乾いたものが擦れる音　「かさ」

（メタファー化）↓

乾燥したもの・乾燥状態

（メタファー化）↓

性格や行動などの粗雑なようす

図4　摩擦音のメタファー化の経路

破裂音から音が発生する際の激しさ、勢いのよさを表すオノマトペにはkan, gan, shan, jyan, ban, bon, pon, ton, donがある。

ドンドン、ボンボン、ポンポン、バンバン等

音 → 音が発生する際の様子

破裂音　激しさ、勢いのよいさま

図5　擬音語から擬態語への拡張パターン2

これらのオノマトペの共通点はC1が破裂音、摩擦音もしくは破擦音で、金属や鉄、木などがぶつかることによって発生する音を表現していることである。このような音が発生するときの激しいイメージから「勢いのよさ」へ拡張すると考えられる。このような音韻形態のオノマトペは「仕事をばんばん／ぼんぼん／がんがん／どんどん／じゃんじゃんこなす」のように、微妙な意味の違いはあっても、同じ文脈で使用されても違和感がない。「かんかん」は「かんかんに照りつける太陽」や「かんかんに怒る」のように太陽が強烈に照りつけるようすや、激しく怒るようすを表す。また、「がんがん」は「頭ががんがんする」のように激しく頭が痛むようすも表す。これらも破裂音からメタファー化されたものであると考えられる。メタファー化の経路は次の図6のように表せる。

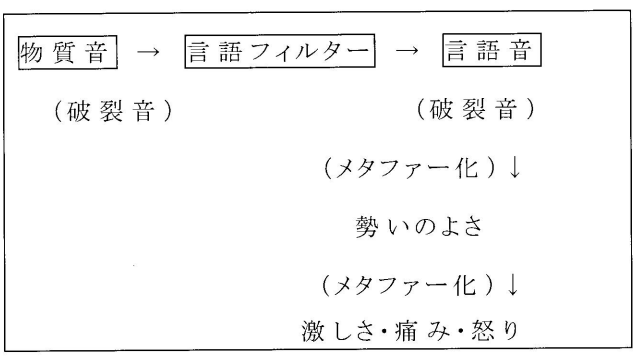

図6　破裂音／破擦音／摩擦音＋V1[a/o]＋撥音[N]のメタファー化の経路

勢いのよさを表す音声系列は下記の図7のように表せる。

破裂音[k][g][b]	＋[a]＋[N]
摩擦音[sh]	＋[a]＋[N]
破擦音[jy]	＋[a]＋[N]
破裂音[b][p][d][t]	＋[o]＋[N]

図7「勢いのよさ」を表す音声系列

4.2　音韻形態それ自体のスキーマが存在する擬態語

音韻形態それ自体のスキーマが存在すると考えられるオノマトペに関しては、同じ音韻形態をもつオノマトペを集め、その意味的特徴を調べる。日本語のオノマトペにはC2に[r]、[k]及び[s]を伴うオノマトペが多いため、C1＋V1(aiueo)＋C2[r]＋V1[aiueo]の形態をもつオノマトペ及びC1＋V1(aiueo)＋C2[k]＋V1[aiueo]及びC1＋V1(aiueo)＋C2[s]＋V1[aiueo]の形態をもつオノマトペを例に挙げて、擬態語の音象徴について考察する。

4.2.1 C2[r]のオノマトペ

[-ara]を音韻形態に持つオノマトペは図8の通り、kara、gara、sara、zara、shara、jyara、tara、dara、chara、hara、bara、para、waraである。

これらのオノマトペのうち、kara、gara、tara、dara、hara、bara、paraのスキーマは「落ちる音や様子」である。C1[k, g, b, p]は個体がぶつかりながら落ちていく際の音や様子を表している。このようなオノマトペは破裂音で、様々な状況の音を表すこともできる。

karaは乾いた固い物が触れ合う音を表す。音の発生源である乾いたものから拡張して「のどがからからになる」のように乾燥状態も表すようになったと考えられる。また、「胃の中がからからだ」のように何もない様子も表すが、これは「空（から）」という漢字の影響であると考えられる。garaはものが崩れ落ちたりする音、引き戸を引く音、うがいの音等を表す。また、声がしわがれている様を表す。「映画館はがらがらだった」のように「空（から）」の影響でgaraも内部に何もない様子も表すようになったと考えられる。

tara、daraは液体が流れ落ちるさまを表している。液状のものがゆっくり落ちるようすから、長引く様子へ拡張されたと考えられる。haraは小さくて粒状のものや薄いものが落ちるさまを表している。haraは気をもんだり、心配したりする心情や様子を表すが、薄いものが落ちたり、散っていく様がメタファー化されて、心の揺れが表現されるようになったと考えられる。tara、dara、haraは音は表さないが、[-ara]という音韻形態が持つスキーマによってオノマトペの意味が形成されていると考えられる。

baraは粒状のものが落ちて散在する様から、細かく分かれる様へ拡張されたと考えられる。paraはページをめくる音や様子も表す。また、雨や粒状のものがまばらに落ちる音やようすから、「人がばらばら集まってきた」のようにまばらである様を表す。

C1が摩擦音で始まるsara、zara、shara、jyara、charaのスキーマは様々な状況での摩擦音である。saraは乾いたものが擦れて発生する音を表すため、拡張しても「さらっとした髪」のように乾燥状態を表す。また、「質問をさらっとかわした」のように、スムーズでわだかまりのなさに意味が拡張されている。zaraは粗い物が擦れる音

を表すため、拡張しても「表面がざらざらしている」のようにきめの粗さを表す。shara、jyara、charaは鈴や硬貨などが触れる音を表す。拡張する意味は「派手さ」や「軽薄」である。waraは余裕なく急いで行動したり、燃え広がることを表し、同じ音韻形態のオノマトペのスキーマには当てはまらない。

schema:　落ちる音や様子
kara(音) → 乾燥 → 何もないようす
gara(音) → 乾燥 → 何もないようす
tara → 長引く
dara → 長引く
hara → 気をもむ
bara(音) → 散在
para(音) → ページをめくる音やようす → まばら
schema:　摩擦音
sara(音) → 乾燥 → わだかまりのなさ
zara(音) → 粗さ
shara(音)
jyara(音) → 派手さ
chara(音) → 軽薄
*wara 急いで行動、燃え広がる

図8 [-ara]の意味拡張

(音)は音も表せるオノマトペを示す。
「*」はスキーマにあてはまらないオノマトペを示す。

[-ira]を音韻形態に持つオノマトペは図9の通り、ira、kira、gira、chira、hira、bira、piraである。

schema:　小さな揺れ
ira
kira
gira
chira → 断続的に目にうつったりするさま
hira
bira(音)
pira(音)

図9 [-ira]の意味拡張

[-ira]のスキーマは「小さな揺れ」である。[ira]は心の動揺が揺れとして捉えられている。k iraは星が瞬く様子を、giraは太陽が激しく照りつける様子を表す。chiraはものが見え隠れする様がメタファー的に「小さな揺れ」として捉えられている。hiraは軽くて薄いものが揺れながら舞い落ちる様を表している。bira、piraは旗などが風で煽られる際の音や様子を表す。

[-ura]を音韻形態に持つオノマトペは図10の通り、ura、kura、gura、sura、zura、fura、bura、pura、mura、yuraである。

schema:　左右の揺れ
ura
kura → 湯がわきたぎるさま
gura → 湯がわきたぎるさま
fura → 安定感のないさま
bura → 怠惰に暮らしているさま
pura → 流されるままに過ごすさま
mura
yura
*sura　滞りなく進行するさま
*zura　並んでいるさま

図10 [-ura]の意味拡張

これらのオノマトペのスキーマは左右の揺れである。C1が異なることによって、様々な揺れを表す。uraは目差しが揺れ動くようすを表している。kura、guraは「地震で家がぐらぐら揺れた」のように実際に不安定に揺れる様から「頭がくらくらする」や「気持ちがぐらつく」などのように目に見えない痛みや心情に拡張される。また、湯がわきたぎる様に拡張されている。furaは揺れる様子から「定職に就かずにふらふらしている」にように、生活に安定感のないさまに拡張されている。bura、puraは左右に揺れる様から拡張され、「家でぶらぶらしている」のように怠惰に暮らしているさまや、流されるままに過ごすさまを表している。muraは抑えきれない感情が湧きあがってくるなど、心の揺れを表している。yuraは物理的に揺れる様子や心の揺れを表す。suraは滞りなく物事が進行するさまを表し、zuraは次から次へと並んでいるさまを表し、「左右の揺れ」というスキーマには当てはまらない。

[-era] を音韻形態に持つオノマトペは図 11 の通り、kera、gera、hera、bera、pera、mera である。

schema: 笑う・しゃべる

kera(音)

gera(音)

hera → へつらうさま

bera

pera(音) → ページをめくる時の音やようす

→ 薄いさま

*mera 炎をあげて燃えるさま → 嫉妬や怒り

図 11 [-era]の意味拡張

これらのオノマトペのスキーマは「笑う・しゃべる」である。kera、gera、hera は笑う表情や声を表す。hera は卑屈にこびるような表情を表すことから「へつらうさま」に意味が拡張している。bera、pera はよくしゃべるさまをあらわす。[e]はこのように下品な音やようすを表すことがおおい。pera はページをめくる時の音や様子も表すことから、音の発生源である紙がイメージされ、薄い様にイメージが拡張されている。mera は炎をあげて燃えるさまや嫉妬や怒りを表し、「笑う・しゃべる」というスキーマとは一致しない。

[-ari] を音韻形態に持つオノマトペは図 12 の通り、kari、gari、bari、pari である。

schema: 噛み砕いたり割れる音やようす

kari(音) → ひっかく音 → 苛立ち

gari(音) → ひっかく音 → 非常にやせているさま

bari(音) → 勢いのよいさま

pari(音) → 乾燥しているさま

図 12 [-ari]の意味拡張

これらのオノマトペのスキーマは「噛み砕いたり割れる音やようす」である。C1 が[k, g, b, p]と全て破裂音になっている。kari、gari 共にひっかく音も表す。kari から拡張して苛立ちを表し、gari から拡張して非常にやせている様を表す。bari は「ばりばり働く」のように勢いのよいさまを表す。これは、固いものが割れて bari という音が出る際の様子からイメージされたと考えられる。pari は「洗濯物がぱりぱりに乾く」のように乾燥状態を表す。これは、pari という音の発生源である固くて乾燥したものから意味が拡張していると考えられる。

[-iri] を音韻形態に持つオノマトペは図 13 の通り、kiri、giri、jiri、chiri 、hiri 、biri 、piri である。

schema: きしむ音やようす

kiri(音) → 神経質 → 痛み

giri(音) → 限界

schema: 裂ける音やようす

biri(音) → 神経を刺激するさま

piri(音) → 神経を刺激するさま

schema: 焼ける音やようす

chiri(音)→ 縮れているさま

jiri(音) → 照りつける様子 → 少しずつ進む

→ 苛立ち

*hiri 火傷や炎症のときの痛み

図 13 [-iri]の意味拡張

hiri 以外は音を表す。このような形態のオノマトペのスキーマは、音の性質によって分けられる。kiri、giri のスキーマは「きしむ音やようす」である。kiri から拡張して神経質な様子や「胃がきりきりする」のように鋭い痛みを表す。giri から拡張して「ぎりぎりの線で手を打つ」のように限界を表している。

biri、piri のスキーマは裂ける音や様子である。「ぴりぴりした雰囲気」のように緊張感や神経を刺激する様に意味が拡張している。母音[i]には甲高くて鋭い音を表すという意味とそこから拡張して緊張感や神経を刺激する意味がある。

chiri、jiri のスキーマは焼ける音や様子である。chiri は焼けて縮れている様に意味が拡張している。jiri は照りつける様子や少しずつ焼けることからイメージが拡張し、少しずつ進む様を表している。また、「結果をじりじりしながら待った」のように苛立ちへも拡張している。

hiri は火傷や炎症のときの痛みを表し、この音韻形態のオノマトペのスキーマとは一致しない。

[-ori]を音韻形態に持つオノマトペは図 14 の通り、kori、gori、zori、jyori、bori、pori、mori である。

schema： 噛み砕く音やようす
kori（音） → 弾力のあるさま
gori（音）
bori（音） → 掻く音やさま
pori（音） → 掻く音やさま
schema： 剃る音やようす
zori（音）
jyori（音）
*mori よく食べるさま → 勢いのよいさま

図 14 [-ori]の意味拡張

kori、gori、bori、pori のスキーマは「噛み砕く音やようす」である。kori は「この刺身はこりこりしている」のように歯ごたえがあって弾力がある様子を表す。bori、pori は噛み砕く音や皮膚などを掻く音や様を表すが、対象物の様子は表わさない。

zori、jyori は剃る音や様子を表す。mori は音を表さない。「もりもり食べる」や「元気もりもり」のようによく食べるさまや勢いのよいさまを表し、同じ音韻形態のスキーマには当てはまらない。

[-uru] を音韻形態に持つオノマトペは図 15 の通り、uru、kuru、guru、suru、zuru、tsuru、furu、buru、puru である。

kuru、guru のスキーマは「回転」である。guru は腹の鳴る音も表す。suru、zuru、tsuru のスキーマは「滑る音やようすである。suru は滑らかに滑る様子から、滞りのないさまへ意味が拡張している。zuru、tsuru は麺類を食べる時などの「すする音やようす」も表す。zuru は締まりのないさまへ拡張する。uru、furu、buru、puru は「揺れや震え」がスキーマである。uru は目が涙でいっぱいになり、涙が揺れているさまを表す。furu、buru、puru は寒さや緊張、恐怖、怒りなどで小刻みに震える様を表す。

schema： 回転

kuru
guru（音） → 腹の鳴る音
schema： 滑る音やようす
suru → 滞りないさま
zuru（音） → すする音やようす
→ 締まりのないさま
tsuru（音） → すする音やようす
schema： 揺れ・震え
uru
furu
buru
puru

図 15 [-uru]の意味拡張

[-oro] を音韻形態に持つオノマトペは図 16 の通り、oro、koro、goro、kyoro、gyoro、soro、zoro、jyoro、choro、toro、doro、noro、horo、boro、poro、yoro である。数は非常に多いと言える。

koro 及び goro のスキーマは「回転」である。kuru、guru との違いは、kuru、guru が「こまが回る」ように軸を中心に円状に回るのに対し、koro、goro は地面を転がっている音や様子を表す。koro は円形のものが転がることから、「ころころとしてかわいい」のように、丸くて太っているさまに拡張されている。また、「ころころ変わる」のように簡単に変化する様にも意味が拡張されている。goro は雷の音も表す。「石がごろごろしている」のように散在している様子や「家でごろごろしている」のように無駄に過ごす様にも意味が拡張している。

oro、kyoro、gyoro、yoro のスキーマは「左右の動きや揺れ」である。oro は不安感やどうしてよいかわからず、右往左往している様子を表す。kyoro、gyoro は目の焦点が定まらず、目を動かしているようすを表す。yoro は体を揺らしてゆっくり歩いている様子を表す。

jyoro、toro、doro、horo、boro、poro のスキーマは「上から下への動き」である。jyoro、toro、doro は液体が垂れる様子を表す。jyoro は水が流れ出る音も表す。toro は液状のものが垂れる様がゆっくりであるために、緩慢な様や眠気を催す様に拡張されたと考えられる。doro は

toroよりも粘液性が強く、粘土や泥などのイメージから、ひどく汚れる様に拡張されたと考えられる。horoは涙が流れる様を表す。horoはC1が[h]であり、軽くて薄いものが落ちる様子を表す。boro、poroは涙や粒状のものがこぼれ落ちる音や様を表す。崩れてしまうほどもろいという意味に拡張されている。また、「ぼろぼろの服」のように汚れて古い様にも意味が拡張されている。soro、zoro、choro、noroのスキーマは「動く様子」、特に「歩く様子」である。soroは慎重にゆっくり物事を行うさまでzoroは多くのものが連れ立って動くことを表す。choroは小さなものが動き回るさま。noroはゆっくり歩く様子を表す。歩く様子を表すオノマトペは形態は違うが、noshi、toko、tekuのように豊富に存在する。

schema： 回転
koro（音）→ 丸いさま → 変化するさま
goro（音）→ 雷の音 → 散在
→ 無駄に過ごす
schema： 左右の動き、揺れ
oro
kyoro
gyoro
yoro
schema： 上から下への動き
jyoro（音）
toro → 液状 → 緩慢なさま → 眠気
doro → 粘液状 → ひどく汚れるさま
horo → 葉などが散るさま
boro（音）→ もろいさま
→ 汚れて古いさま
poro（音）→ もろいさま
schema： 動く／歩く様子
soro
zoro
choro
noro

図16 [-oro]の意味拡張

4.2.2 C2[s]のオノマトペ

[-asa]を音韻形態に持つオノマトペはkasa、gasa、basa、pasaである。

schema： 摩擦音
kasa（音）→ 乾燥状態 → 心に潤いのない様
gasa（音）→ 乾燥状態
basa（音）→ 乾燥状態
pasa（音）→ 乾燥状態

図17 [-asa]の意味拡張

[-asa]を音韻形態に持つオノマトペのスキーマは「摩擦音」である。これは、[s]を含んでいるためであると考えられる。全て、乾燥したものが触れ合って立てる音を表すため、音の発生源である乾燥状態に拡張している。「肌がかさかさになった」と「肌ががさがさになった」を比較すると後者の方が肌がささくれだって乾燥の度合いが高いことがわかる。「髪がばさばさになった」「髪がぱさぱさになった」の例文では、オノマトペを「かさかさ／がさがさ」に変えると違和感がある。即ち、同じ乾燥状態を表すものでも何の乾燥状態を表せるかは微妙に異なるということである。kasa、gasaは「心がかさかさ／がさがさしている」のように心に潤いがない様に意味が拡張される。

[-ishi]を音韻形態に持つオノマトペは例18の通り、kisi、gisi、hisi、bisi、pisi、misiである。

schema： きしむ音
kishi（音）→ 隙間のないさま
gishi（音）→ 隙間のないさま
mishi（音）

schema： 打つ音
bishi（音）→ 容赦のないさま
pishi（音）→ 容赦のないさま

*hishi 身に迫るさま

表18 [-ishi]の意味拡張

kishi、gishi、mishiのスキーマはきしむ音である。これらのオノマトペは隙間のない様に拡張している。形態は異なるが、kichi、gyuuも隙間のない様を表す。

bishi、pishiは鞭などで打つ音を表す。音が出る際の

様子から、容赦のない様に拡張されたと考えられる。

[-oso]を音韻形態に持つオノマトペは、図19の通り、koso、goso、boso、poso、moso、noso である。

koso、goso、boso、poso のスキーマは摩擦音である。[s]が音韻形態に含まれているためであると考えられる。koso はかすれるような小さな声で話すことから、静かに事を行うことに意味が拡張されている。goso はこわばったものなどが荒く触れ合う音を表すことから、落ち着きなく動くさまに意味が拡張されている。boso、poso は摩擦音[s]を含む多くのオノマトペがそうであるように、音の発生源である乾燥状態に意味が拡張している。

moso は小さな虫などが這い回る様子を表している。また、[-oso]という形態のためか、水気がないさまも表している。noso は歩くのが遅い様を表している。moso、noso は[-oso]のスキーマには当てはまらない。

schema： 摩擦音
koso（音）→ 静かに事を行う
goso（音）→ 落ち着きなく動く
boso（音）→ 水分がなくなる
poso（音）→ 水分がなくなる
*moso 這い回る → 水気がない
*noso 動作が遅い

図19 [-oso]の意味拡張

4.2.3 C2[k]のオノマトペ

[-ika]を音韻形態に持つオノマトペは図 20 の通り、chika、bika、pika、nika である。

schema： 点から広がる動き
chika → 目を刺激するさま
bika
pika → 新しいようす
nika

図20 [-ika]の意味拡張

これらのオノマトペのスキーマは点から広がる動きである。これらのオノマトペは音は表さない。chika、bika、pika は光が点滅する様子を表している。nika は無表情から笑顔になる変化という点で、点から広がる動きからメタファー化されている。

[-uka]を音韻形態に持つオノマトペは図21の通り、uka、suka、zuka、tsuka、fuka、buka、puka、muka である。

これらのオノマトペのスキーマは「揺れ」である。uka は注意が不足していて落ち着かない様を表す。即ち、心の揺れを表している。suka は隙間のある様を表す。zuka は遠慮なく入りこんでくる様を表す。tsuka は遠慮なく進みでる様を表す。suka、zuka 共に勢いよく歩く様子が「揺れ」というスキーマから事例化されたものであると考えられる。fuka は適度な弾力で膨らんでいる様を表す。buka は靴やズボンなどのサイズが大きすぎる様や水に浮かぶ様を表す。puka は水に浮かぶ様を表す。fuka、buka、puka 共に上下の揺れがイメージされる。muka は怒りがこみ上げてくる様や、吐き気を催す状態を描写し、気持ちや気分の揺れを表している。この形態のオノマトペは音を表さない。母音[u]と[a]の交替により揺れを表すと考えられる。C1 が変化することによって、様々な「揺れ」が事例化されている。

schema： 揺れ
uka
suka
zuka
tsuka
fuka
buka
puka → タバコをふかすさま
muka

図21 「−uka」の意味拡張

5. 結論

本稿の目的は擬態語の音象徴を体系的に示すことである。擬態語には擬音語から拡張するものと、音韻形態それ自体のスキーマが存在するものがある。擬音語から拡張するものは、擬音語からの拡張プロセス、メタファー化の経路を明らかにすることによって、音と意味の関わりを明らかにした。音韻形態それ自体のスキーマが存在するものに関しては、共通の音韻形態を持つオノマトペを集め、共通の意味、即ちスキーマを探ることで、音と意味とのつながりを明らかにした。以下に考察から得られた結論を記す。

5.1 擬音語から拡張する擬態語

擬音語から擬態語に拡張する際に、いくつかのメタフ

ァー化のパターンがあることがわかった。擬音語から拡張した擬態語の音象徴は遡って擬音語の音象徴に辿り着くことがわかる。

＜メタファー化のパターン１＞

音 → 音の発生源 → 発生源の性質 → 性格・心情

例．かさかさ、ばさばさ

摩擦音 → 乾燥したもの → 乾燥状態 → 潤いのなさ

例．かちかち、がちがち、ごつごつ

破裂音 → 固い物 → 固い状態 → 頑固・緊張、荒っぽさ

＜メタファー化のパターン２＞

音 → 音が発生する際の様子

例．ばんばん、どんどん

破裂音 → 勢いのよさ

例．かたかた、がたがた

破裂音 → 揺れ、震え

例．びちゃびちゃ

水がはねかえる音 → 水浸しになるさま

5.2 音韻形態それ自体のスキーマが存在する擬態語

V1C2V2 を固定して、14 の音韻形態のオノマトペのスキーマを特定した。同じ形態でも複数のスキーマを持つものがある。それは、擬音語から拡張したものであり、擬音語の性質、即ち C1 が異なるために拡張する意味も異なってくるためであると考えられる。摩擦音や揺れ、震えなどは様々な音韻形態のオノマトペに表れているが、それぞれ微妙に異なった意味を表している。Hamano (1986) が指摘したように、一つの音素自体に象徴的な意味がある場合もあるが、本稿で考察したように、オノマトペを構成する音韻形態自体にスキーマ的意味があることがわかった。

[-ara]	落ちる音や様子 摩擦音
[-ira]	小さな揺れ
[-ura]	左右の揺れ
[-era]	笑う・しゃべる
[-ari]	噛み砕いたり割れる音やようす
[-iri]	きしむ音やようす 裂ける音やようす 焼ける音やようす
[-ori]	噛み砕く音やようす 剥る音やようす
[-uru]	回転 滑る音やようす 揺れ・震え
[-oro]	回転 左右の動き、揺れ 上から下への動き 動く／歩く様子
[-asa]	摩擦音
[-ishi]	きしむ音 打つ音
[-oso]	摩擦音
[-ika]	点から広がる動き
[-uka]	揺れ

表 3. 音韻形態のスキーマ的意味

5.3 子音と母音の性質について

本稿の考察において、オノマトペの子音と母音の性質について明らかになったことを記す。

V1 の[i]は甲高い音や鋭い痛み、神経が刺激を受けること、光を表す。例：[kin][hiri][piri][pika]
V1 と V2 母音の交替（[i] → [a]）([u] → [a])で揺れや動きを表す。例：[ira][chira][uka][muka]
V1 及び V2 が等しい場合 (V1[u]V2[u]、V1[o]V2[o]) は回転を表す。例：[kuru][guru][koro][goro]
母音は[e]が少なく、下品な音を表す。 例：[gero][hera][dere]
音を表すオノマトペは C1 が破裂音[k, g, t, d, b, p]が多い。例：[pan][ban][ton][don]
[s][z]は摩擦音を表す。例：[sara][zara][kasa]
語頭子音[h]は音を表しにくい。 例：[hara][hira][hiri]
語頭子音では[n][r]で始まる音が少ない。
擬音語の場合は C1 が音の性質を決める。
C1 と C2 が一致することはほとんどない。 例：*[kaka] *[sasa] *[tata]

C1 が有声音、C2 が無声音はあっても、逆はない。 例：[gasa][basa]／*[kaza]*[haza]
C1 が有声無声ペアはスキーマが同じで、拡張する意味も似ていることが多い。また、C1 の有声無声ペアは存在する場合が多い。 例：[kura][gura]／[fura][bura]
C1 有声無声ペアから拡張された意味は有声音の方が大きさ、強さ、激しさなどの程度が高い。 例：[ton]＜[don]　[kon]＜[gon]

表 4. オノマトペの子音と母音の性質

6. おわりに

擬音語の場合は音を表すため、音韻形態とその意味との関連が比較的明確であるのに対し、擬態語の場合は人の性質や様子、物の状態や動く様子など、聴覚以外で捉えられる感覚や心情が言葉になって表現されているため、その音韻形態と意味との関わりが明確ではない。本稿では、擬音語から拡張する擬態語のメタファー化の経路を明らかにすることで、擬音語から拡張する擬態語の音象徴を明らかにした。また、音韻形態それ自体のスキーマが存在すると考えられるオノマトペの場合は、共通の音韻形態を持つオノマトペを集め、その音韻形態に共通の意味を特定することによって、擬態語の音象徴を明らかにした。

一見漠然として何の規則もないように見える擬態語の音象徴をメタファー及びスキーマの概念を用いて体系的に示すことができた。また、オノマトペの子音と母音の性質についても一定の傾向性を示すことができた。

本稿では、V1C2V2 を固定し、C1 を変えた例のみを示したが、C2、V1、V2 も変えるなどして、様々なバリエーションを設定して調べたい。また、さらに多くの音韻形態のオノマトペを分析し、その音韻形態と意味との関わりを明確に示すことが今後の課題である。

参考文献

1) Hamano, Shoko The Sound-symbolic System of Japanese Ph.D.dissertation,University of Florida,1986,224-227
2) 早川文代, オノマトペのもと, (日本語オノマトペ辞典), 小学館, 2007, 33
3) 田守育啓 ・ ローレンス・スコウラップ, オノマトペ ―形態と意味―, くろしお出版, 2001, 115-123, 19-32, 63-68
4) 大坪併治, 擬聲語の研究, 風間書房, 2006, 124-125
5) 秋元美晴, わかりやすい語彙, 語文学社, 2004, 138-140
6) 筧壽雄, 一般語彙となったオノマトペ, 大修館書店（月刊言語 Vol. 22. No. 6), 1993, 39-42
7) 吉村公宏, はじめての認知言語学研究, 2004, 98-100, 126-127
8) 山梨正明, 認知文法論, ひつじ書房, 1999, 95-97